

作庭実習「森をつくる」8

環境共生園 2008

岡林 利江¹⁾・岩村 伸一¹⁾

Seminar in Garden Design, “Creating a Forest” 8 :
Kyoseien 2008

Rie OKABAYASHI and Shinichi IWAMURA

抄 録：京都教育大学の美術科で開講されている『作庭実習』は、附属環境教育実践センターの環境共生園をその舞台とし、作庭を通して森をつくるということをテーマにしている。参加者は体を使って空間を変えることに取り組んでいる。ここでは、2008年の作業の実際を、作業者の眼を通して、日時を追って報告している。

キーワード：庭，森，環境共生園，作業，身体

私，岡林利江は2007年度，2008年度の作庭実習に参加している美術科の4年生です。

● 1月16日（水） 作庭研究 13：00～17：00

参加者：高坂有梨，岡林利江，大平和弘，渡辺優，安田孝一，岩村伸一

初め10立方メートルの土を運搬。赤松林の丘の予定地へと。運びながら，レーキで均し，踏み固めてゆく。あんころもちに似た色白の丸い石が，丘の裾のあたりにある。

その後，日もだいぶ傾いた頃，男手は池の底の大きな石（一抱えほどある）を一輪車などで，一箇所に集める。大平さんがたくさん乗せすぎて一輪車を転覆させていた。集められた石は，大体どの石も大きさは似ている。女手と岩村先生は両手の平ほどの大きさのぐり石を，庭全体から探して集める。池の岸辺近くの水の中に洲浜を作るためのものだろうか。これも，大きな石の集められているところへ固めておく。こういったぐり石は，共生園の縁のあたりにたくさん見られた。（おそらく，邪魔になるので過去に投げ捨てたのだろう）手箕を一所に置いて，そこに石を集め，運べる目一杯の量になったら，石置き場へ持っていく。これを何度か繰り返した。仕事を終えても，まだ目が石を探していた。

1) 京都教育大学

● 1 月 24 日（木） 作庭実習 3, 4 限

参加者：高坂、藤井麻理、守安藍子、河野竜太、西田佳那子、森岡輝次、岡林、大平、安田、片岡健助、大岸祿弥、岩村

この日は非常に寒く、雪も本格的に空から降ってきていた。共生園に到着した時に、トラックに積まれたたくさんの木を見て、興奮する。かなり形の大きなものもある。初めに集合して、木を定植する方法を実演でおおよそ理解する。それから 2 人 1 組になり、腰から胸の高さほどの小さめの苗を植える。その次に、ヤマザクラ、ソメイヨシノを植える。ヤマザクラは池の向こうの山の方へ 2 本。そして、ソメイヨシノは池の道路に近いあたりへ。ヤマザクラは山に生えているし、ソメイヨシノは里の近くに誰かが花見をしようというつもりで植えた、という見立てを岩村先生はしている。

「これは名所をつくってしまったね。」

様々な木は、その種がもともと自生するところで、庭の中でそう見立てられている場所に植えてゆく。たとえば、川沿いにはエゴノキ（坂東先生のリクエスト）、湿地帯にはハンノキを植える、など。

流れの支流が本流とほぼ直角に交わっている、その支流の岸辺に何本かツバキを植えた。これは岩村先生の以前見た光景の再現だ。木には様々な名まえがあって、聞きなれないものもたくさんあった。

今年植える苗は、去年のものが夏の乾燥で枯れてしまったため、根元から一寸ほど深いところまで埋めて、乾燥の対策とした。また、根が広く張れるように穴も大きく掘って、土にガラが多いところには、柔らかな真砂土を入れた。根を埋めてしまったら、最後に雨水が溜まるように水鉢を作る。

前日に降った雨で重くなった土を、運ぶ。その運んだ先の丘に、いよいよアカマツを植えた。アカマツは合計 10 本。苗には見たことないような小さいマツボックリがついていた。

丘の北の裾に、前回転がしておいた丸いあんころもち石を据えた。

定植した木（植えずにおいたものもある）

シバグリ 3 本、サワグルミ 2 本、ヤマハンノキ 3 本、シロダモ 3 本、ナギノキ 3 本、タブノキ 3 本、ツノハシバミ 5 本、アカシデ 3 本、ヤシャブシ 5 本、アキグミ 1 本、ヤマモモ 3 本、ナラガシワ 3 本、カヤ 3 本、ソヨゴ 5 本、ガマズミ 3 本、アカマツ 10 本、ヤマザクラ 2 本、ソメイヨシノ 3 本、ツバキ 6 本

● 2 月 13 日（水） 作庭研究 13:00～

参加者：守安、岡林、大平、安田、山本真澄、山内朋樹、岩村

午前中に、支柱に使う竹を大学グランド横の竹林から調達する。（岩村先生、守安、岡林）

この日も寒く、雪が降ったり止んだりしていた。始め土運びをする。昨日は雨が降ったので、土がとても重くなっていて、難儀する。その後、前回植えた木に支柱を立てていく。一服後に松の苗の支柱を立て、最後にツバキと細い苗に、残った竹で支柱を立て、作業を終えた。



ソメイヨシノ



アカマツ

● 4月9日（水） 立て札をたてる
岡林，岩村

段々畑の一番上の段に白い立て札を立てる。少し大きく感じる立て札かもしれない。
春の共生園の写真を撮る。小さな若葉が一面に地面に生えて、踏むのが惜しいほどだ。



● 5 月 31 日（土） 培土園 （草刈り，土運び）

参加者：大平，安田，山内

● 6 月 1 日（日） 培土園 9：00～17：00 頃

参加者：岡林，春名大輔，吉岡博士，深町和代，安田，山内，岩村，

一番里寄りと想定される石垣を，この日に作る。

2 人 1 組になり作業をする。石垣の幅 4 メートル程あるところに，3 組ほどが，左右と真ん中に分かれて作業をする。

適当な石を探し出してきて，一段目の上に安定するように，2 人でああでもないこうでもない意見を出し合いながら，様々な場所へ試してみる。パズルの要領だが，石には様々な面の形があるし，面には傾きがあるし，石は重いので，どこにはまるだろうとぐるぐる回していたら，何が何だかわからなくなってしまったりする。頭の中が真っ白になってしまう感じに。作業のし始めは，そんな風にぼんやり居すくんでしまう事がよくあったが，だんだん慣れてくると，頭というよりは体の動かしかたが分かってきて，そういうことはなくなっていった。

ペアの 2 人の意見が時々食いちがって，お互い躍起になって主張していることもあった。

完成した石垣を見て岩村先生は，素人くさくて素朴な感じがして良いと言う。今日作ったものもなかなかだが，段々畑の石垣も，以前のメンバーだった鷺田さんが困りながらやった感じが出ていてとても好きだ，ということも言っている。作りすぎでは面白味に欠けるのだそうで，わたしには，観てみても，素人くささとか，素人くさくないぎりぎりのラインのようなものは分からないけれど，見飽きない感じはした。特に自分たちのやった辺りの石垣は。

石垣が大方できてきた頃，段々畑の排水のための用水路に石橋をかける作業が始まった。（岩村先生，山内さん）それまでここには板切れの橋が渡してあって，そこを土を運搬する一輪車が橋を揺らしながら通っていた。板切れの橋も気に入っていたが，用水路をかつちりしたものにするために，石橋があれば風景はより里山のものらしくなるのでは，と岩村先生。

石橋を渡すには，橋が沈んでしまわないようにその下にも石が支えていて，その石をまず据えるために，橋よりもずっと大きな穴を掘らなくてはならなかった。その穴を掘っていたら，大きなコンクリート片が出てきて，また一苦労な様子だ。一番下の石を据え，次に橋げたの石を用水路の両側の壁にはめ込むようにして，最後に橋そのものをその上に置いた。橋作りは，どんつき及び掛矢という名の木槌の大きいもので，石を力いっぱい打ち込むという印象だった。出来上がった時には皆はしゃいで，いっぺんでも渡ってみずには居れないようだった。といっても，わずかに半歩で渡れてしまうのだが。最後に，リュウノヒゲを橋のたもとに植えた。穴を掘るのに除けてしまったものだ。植えると，橋はもうだいぶ前からあったような顔をしだした。



● 6月2日（月） 培土園（石垣仕上げ）

参加者：山内，安田

● 11月6日（木） 作庭実習 草抜き 3，4限

参加者：兼松奈々子，古田恵，藤川ゆずき，川内絵里菜，東江諭，中塚美希，橋本侑佳，藤本絢香，若狭愛，鈴木健剛，岡林，守安，岩村

共生園で新メンバーの作庭実習。お天気に恵まれた。作業をしていると、汗が流れ落ちるほどだった。

作業を終えてみると驚いた事に、もうすっきりして見える程に、広く草が抜けていた。参加者も、物腰に余裕があるように見えた。橋本さんが手を止めて笑っていて、取り巻く雰囲気ものどかなその光景が、頭の中に映像のように残っている。庭の作業の中では、このような何げないことが頭の中に映像となって残り、いつまでも鮮明に覚えていることがたまにある。

作業がこんなにはかどったのは、岩村先生によると、すでに3回大学での作業をしてきているので、体が慣れていて、自然に例年よりも効率が良くなったのだろうということと、右手の森側からではなく、草の背丈が低い池の周辺から始めたからだろう、とのことだった。

道路近くの石を集めてある辺りには、背の高い草が生い茂っていた。巨大なヨモギ，セイタカアワダチソウ，そしてヌスビトハギ。ヌスビトハギの領域は、やはり毎年増えているのだろうか。全身で草に向かっていくようにして、このあたりの草を抜いた。石の下に根が張ってい

て、とてつもなく抜きにくいものがあると、その度に目の前がまっ暗になるように感じた。それを振り払うようにして、作業を続けた。途中で守安さんがこのあたりにやってきて、草や虫や石にいちゃもんをつけながら楽しそうに草抜きを始めると、私のそのまっ暗がどこかへ行ったきり出てこなくなったのがおかしかった。



池の周辺の草を抜く



生い茂る草

● 11 月 13 日（木） 作庭実習 草抜き

参加者：井ノ口志麻，古田，武田彩，藤川，川内，中塚，橋本，藤本，若狭，守安，岡林，古川三盛，岩村

池の周辺と底を草抜くグループと、それより南側を抜くグループの二手に分かれて作業する。南側は一面に背の高い草が生えている。じきに軍手もシャツもひつつき虫だらけになった。ヌスビトハギを始末する時には、根元から 5 センチほどの所で切ったら、草の翌年生長する勢いはだいふ抑えられるということで、スコップを使って掘り返し、根を断ち切る。地面が固くてスコップがうまく使えないときには、つるはしを使い周辺を柔らかくしてから抜く。そのようにして、つるはしで根の周りを掘り起こしていると、古川さんが、「ヌスビトハギの向こう側を掘らなくちゃ。」と教えてくれた。ヌスビトハギの株の向こう側につるはしをつきたて、後は柄を向こう側へ倒せば、てこの原理によって、軽い力で一発で掘れてしまうのだ。それから、藪の中に入る時は、茎を切って背を低くしておくと、あとでひつつき虫を取る手間がはぶける。ひつつき虫まみれになってしまうことを、仕方がない事だと思っていたが、仕方なくはなかった。いつも授業が終わってから、何時間も掛かってウロコ状にくっついたひつつき虫を取る仕事があって、これは草抜きそのものに匹敵するくらい大変だった。やり方一つで、ずっと手間が減らすことができる。目からウロコの思いだった。



作業の終わった頃

● 11月20日（木） 作庭実習 草抜き

参加者：兼松、藤川、武田、川内、中塚、鈴木、岡林、岩村

今日は道路側からではなく、消防学校側から草を抜いていく。段々畑の狐色に枯れているネコジャラシをかき分けて、アカマツの丘へ。ここは草も割合まばらだ。背は高いが、去年入れた真砂土の上に生えているので、少ない力で根の先端まで一気に抜けてしまう。根の標本が作れそうなくらいだ。気分が良い。実習の前に、色々な草の根がどのようなになっているかを学んでいた。黄色い花のセイタカアワダチソウは、根は地面近くをずっと這い進んでいて、その根から茎が生えてくる。ヨモギも同じような根をもっていて、アワダチソウの近くには生えない。実際に見てみると、2種類は隣り合っていることはあるけれど、それぞれ固まって生えていた。たまたま、ヨモギの中にもアワダチソウが生えていた。

しゃがみこみ、手の届く範囲の草を抜いては前へ進み、抜いては前へ進みしていたら、草むらに居心地の良い凹みができていた。

一服後に岩村先生と岡林は、石橋の向こう側の鬱蒼とした藪にとりかかる。この辺りには、枯れて乾燥したヌスビトハギとヨモギのお化けが密集していた。枯れたものは根から抜く事ができない。地面のところでぶつりと切れてしまう。丘の方へ進むにつれまだ青々としているヌスビトハギがあった。おどろいたのは、5ミリ以上の太さのある茎が6本も出ている、直径10センチ以上の株があったことだ。この頃、スコップを手に丘側から進んできていたグループと合流し、藤川さんにこのヌスビトハギを抜いてもらった。

草で覆い尽くされていた状態では、アカマツは8本しか見つけることができなかったが、この日の終わりに10本皆揃っていることを、岩村先生が確認した。10本ともしっかりと根付いているようで、葉も青々としている。

授業の終わりには、ヤマザクラの山の辺りから、段々畑、石橋から丘へ通じる一帯まで、すっ

きりと草が除けられた。抜かれた草は大きな山をなしていた。

● 11 月 22 日 (土), 11 月 24 日 (月) 培土園

参加者 22 日: 安田, 岡林, エマニュエル・マレス, 山内 24 日: 山内, 安田, 大平

培土園が導入される。授業でやるには困難な場所を草刈り, 草抜きをする。

午前中は安田さんが刈り払い機で, ツバキが群生しているあたりと森の縁辺の草を刈る。岡林は森の中の小振りの草と, 流れのヌスビトハギを抜く。

森の陰では, ヌスビトハギも大きくなれないし, 実もつけられないようだ。日陰から出るや草は壁のようにになる。刈り払い機の入りづらいだろうと思われるところの草と, 森の中の柔らかい小さな草を, しゃがみこんで抜いていった。真ん丸いドングリがたくさん落ちている。それから嫌になるくらいセミの死骸が。一度にこれだけ見たのは初めてでおどろいた。熱気だめがねがうっとうしくなって外すが, するとブヨが目の中へ飛び込んでくるので, やっぱり掛けておくことにした。蚊もまだ飛んでいる。

一服後, 流れの一番上流のあたりから, 落ち葉を除き, 草を抜き, 埋もれていた石組みがはっきりと見えるようにしていく。流れが森から出る前の所から, 大きなヌスビトハギが現れだした。この時は剪定鋏しか持っていなかったもので, 根元よりも少し下辺りから切っていった。切っては一箇所に積み重ねていくが, 巨大な毛玉のようにになる。茎が, 四方八方に伸びていて, そのうえ丈夫でしなやかなので, 積み重ねると量高くなってしまう。

ヌスビトハギは子孫を残すため種が繁栄する為に, どこまでも計算高く, そしてパワフルな植物だ。多年草で一度根付くと, 年々株は大きくなり, 根を太く深く張り巡らせる。茎は丈夫で柔軟で, 手では引きちぎれない。それなのに, 根元の茎だけは繊維が密でないのか, 力ずくでひっぱると, あっけなくちぎれてしまうのだ。そのことがずっと, 何となく引っかかっていたが, この日ヌスビトハギの藪の中でふと気がついた。これは茎をちぎられても根は生き延びる作戦であるに違いない。流れの中流, 上流あたりは, 共生園の中でも一番古いヌスビトハギの株があるところだ。直径が 10 センチはあるだろう株が, ゴロゴロしている。ほとんど, その生命力に感心してしまった。流れの石に腰かけて, 一体どこから手をつけたら良いだろうと思案した。濃い緑色のもじゃもじゃの藪全体を見渡すとぞっとするので, 隅からなし崩しにしていこうと, 根元のあたりに頭を突っ込んで, 鋏で茎を切っていく。手の届く範囲の茎をみんな切ったと思ったら, 絡み取るようにして集め, 両手で抱えて森の外れに置いていく。こんな方法では, 種も落ちるし, 来年もまた株から芽が生えてくるだろうけれど, 人が入る隙間がなければ, 根を掘り起こす事もできないと思った。スパンスパンと鋏で茎を切りつづける。青々としてしゅっと伸びた茎は, なんだかきれいだった。

ヌスビトハギを切っては進み, 切っては進み, 流れに沿って森から出てきた。そこでお昼になり作業を終えた。ひつつき虫がつかないようにとレインコートを着ていたの, 汗だくだった。

昼からは岡林が抜け, 山内さんとマニュさんが加わり, 夕方までには池の向こう岸, ヤマザ

クラの生える辺りまで草抜きが終わった。

24日、アカマツ林の丘の裾の、ヨモギが繁殖していた辺りまで作業は進んだ。今年の草抜きはこれで終了した。

● 11月27日（木） 作庭実習

参加者：井ノ口、武田、中塚、橋本、藤本、若狭、鈴木、守安、古川、岩村

2つの班に分かれて、土運びと石据えを行う。前半後半で担当を交替する。初め土運び班だったのは、橋本、中塚、武田、藤本、岩村先生、石据え班だったのは、鈴木、若狭、井ノ口、守安、古川さん。

土を運んできたトラックは、池の北側に下ろしていった。土を入れたい場所に近い南側に下ろして欲しかった。深底一輪車3台で、池沿いに南側へ運び、アカマツの丘の裾の方、石垣までの所に土を入れていく。かなりの運搬距離だ。土運びは一輪車のバランスを取るのが難しいので、たびたび転覆ということもあった。この日で、土全体の3分の2を運び終えた。

石据えは、池の北部の一帯に、広い範囲で据えていく。どこに石を置いたらよいだろうか？ 周りの石や野筋との関係をじっくり考えながら、作業を進めていく。

● 12月4日（木） 作庭実習

参加者：井ノ口、古田、武田、川内、中塚、橋本、藤本、東江、若狭、鈴木、岡林、岩村

この日は、石据え班が2班土運び班が1班で、一服ごとに作業を交替した。始め、アカマツの丘の裾の方で、ぐり石を探す。ぐり石は両手のひらの中におさまるほどの小さな自然石で、洲浜を作るときなどに有用なので、土を運び込む前に救い出しておく。去年も共生園中探したが、このあたりはヨモギの深い藪の中だったので、まだたくさん転がっていた。

久しぶりに石を据える作業をして、すっかりはしゃいでいたようだった。作業をしながら、ここではこうした方が良いとか、この次はこうする、などと、自分自身に確認していく為でもあったかもしれないけれど、ずっと声を出していた。それが昂じて、石を岩と呼んだり、池を湖と言ってしまったり、表現がオーバーになりがちだった。

同じ班だった東江君は、次の石をどのように据えたいということがわかるようだった。わたしにはまだその辺りがぴんと来ないので、すごいと思った。

石はこの日合計7つほど据えた。



石の上のジャンケン

休憩時間に、他の参加者はござを敷いてその上でお茶を飲んだりしていたが、わたしはなんとなく坐ってじっとしている気にはなれず、庭をぶらぶらと歩いていた。うずうずして、体が動きたがっていた。池の向こうの山へ上って行って、皆が坐っているのを眺めたり、地形を眺めたりしていたら、踊りたくてたまらなくなってきた。踊っているわたしを少し遠いところから見たような像が、浮かんできた。その場の草の色や、日の光が踊れ踊れといわんばかりに、気持ちを掻き立てていた。しかし、ござの上の人たちは車座になっているけれど、川内さんと東江君がこちら向きに坐っていたし、だだっぴろいので恥ずかしくなってしまった。もどかしいと思いながら、山の上をうろうろしていたら、ふと山の地形の具合、森の方へ吸い込まれていくような斜面の地面のありようがおもしろくて、じっと見入った。枯れ草がその表面を薄く覆っていて、踏むと弾力がある。おそらく足元には草の根がびっしりと張り巡らされていて、土を抱え込んでいる。地下足袋をはいている足に、そんな感じが伝わってきた。アカマツ林の辺りから、森の方へ一気に走っていった。地面のデコボコを飛び越えるようにして、石や植わっている木を避けながら。そして流れの大きな石にぶつかって止まった。してやったりだ、何だか晴れ晴れしい。そういえば、昔から山登りに行っても、帰り、山を下る時には猛スピードで走っていた。作庭実習でも、道具を取りに行く時には、山越え、段々畑越え、石垣を越え、走っていくことが多いかもしれない。川内さんが、滑り台をすべるように何度も走っているわたしをおもしろがって写真に撮った。



● 12月11日（木） 作庭実習

参加者：井ノ口、兼松、古田、中塚、橋本、若狭、岡林、守安、古川、岩村

この日の作業も、班に分かれ土運びと石据え。土の山をすべて運び終え、埋もれていた棚田の一番下の段も、元の形に戻った。

石据えは、古川さんの先導のもと、流れの河口部に6つ7つ据えた。自然の中に見られるような、川のありさまを再現することを試みる。この河口部には、大きな一枚岩があったのが、割れて幾つかの部分になり、その石の間を水が流れる、そういう見立てをして作っていった。棒とロープを使って石置き場から石を運ぶが、まだ皆手際よく運ぶ事は難しい。



河口に据えた石



据えているところ



上の写真は、一服の時の様子。農作業の途中の一服のような趣きだ。古川さんがおいしいお菓子や水を差し入れてくれるので、それを食べたりするのも一服時の楽しみだ。ござの上に座って、にぎやかにおしゃべりする。

帰り際に、子どもが3人来た。あっ、と思う。それとなく彼らの行動を見守る。アカマツの丘へ駆け上がっていったり、石置き場の辺りで何やら探している格好だ。子ども達は、自分たちが注目的である事には気づいていない風だった。岩村先生が土運びの途中に砂山の中から見つけたトレーディングカードを見せ、

「これ君らのか？」

「えっ、違う。」

カードはこの3人の子ども達にやることにした。「やったー」とよろこんでいた。共生園には、2組以上の子ども達がきているようだ。この3人は秘密基地をつくっている。

● 12月18日（木） 作庭実習

参加者：井ノ口、古田、武田、藤川、橋本、若狭、東江、鈴木、岡林、守安、岩村

昼食を、池の石垣に腰かけて食べていた。空を見てぼんやりしていると、鳥の鳴き声がしているのに気がついた。姿は見えないが、空から降り落ちてくるような、その鳴き声にとりこまれている。向かいの寮の、センダンやメタセコイヤなどの大きな木が並んでいるその辺りから、そして共生園の森の辺りから、ひっきりなしに聴こえてくる。池の底では、鳩の群れが何かの種をついばんでいる。ついばみながら少しずつ移動していく。先週の子どもの達の仕業らしい、意味ありげに並べた石が残っていた。丘には、直径40センチほどの穴がぽっかり空いている。新しく運ばれてきた土の山には、一面に鳩の足跡。縮れ毛のダックスフント、ライアンと他にもう一匹犬が散歩にきていた。自転車の前籠にカラスが止まった。犬を連れたおじさんが、森の向こうで何か袋から撒いている。こうした色々なものや出来事は、ばらばらなような、結びついているような、そのどっちとも感じられて、わたしはというと、この不思議な場所の底の所に居るような心地がしていた。



この日は非常に寒く、体を温めるためにも、始めは全員土運びをした。

流れの横のマツが4本まとまって生えている所に土を入れ、地面を高くし、おだやかな傾斜を作った。新しく入った土を、石垣が途切れる先から向こうに運び、丘の上の方から自然な傾斜になるよう均した。

2度目の一服の後から、土運び1班と、石据えが2班に別れて作業。東江、橋本、若狭の三人は河口付近、池の底、池の一番南に石を据える。鈴木、岡林はアカマツの丘に、合計3つの石を据えた。

土を運んだ後、土の山があった場所は地面がデコボコしていたので、正月が迎えられるようにと、岩村先生はレーキで均していった。



池の石組み